

江戸版往来物の本文

—近世前期における江戸版本文の特性(3)—

母利 司朗

はじめに

本稿は、近世前期に江戸で出版されたいわゆる江戸版の本文の性格を考える一環として、御伽草子、仮名法語をとりあげた先の二稿⁽¹⁾に続き、往来物の本文の性格について論じるものである。

今回とりあげる往来物は、上方・江戸を問わず、確実に需要のある手堅い分野とみなされたためか、近世前期の江戸の出版物の中では早い時期より盛んに出版されていたジャンルである。

江戸版の往来物について、筆者はかつて、明暦二年の年号を文中にもつ『新用文章』の江戸版である明暦三年刊松会版『江戸／新用文章』(下巻題簽の書名。刊年は上巻末に記載される刊年)をとりあげ、その「原稿」となったと思われる上方版『かわり／新用文章』(刊年不明。龍谷大学図書館蔵)との関係を述べたことがある⁽²⁾。また承応三年に京都の水田甚左衛門の出版した『人倫名尽』と、それを一部手直ししながら覆刻した明暦二年刊江戸版『人倫名尽』(書肆名不明)との関係についても論じたことがある⁽³⁾。これらはともに、先にとりあげた御伽草子や仮名法語の場合のような、上方版を「原稿」としての「翻刻」

による出版と異なり、「覆刻」による出版事例であった。今回とりあげる『都名所往来』⁽⁴⁾も、上方版を原稿として覆刻によって江戸版が作られた例である。上方版と江戸版の関係を考えるにあたって、同じ往来物でも、『庭訓往来』や『御成敗式目』といった作品ともなれば、収拾のつかないほどに版種が多く、それらの関係を明らかにすることは不可能に近い。それにたいし、『都名所往来』は、上方版・江戸版ともに版種はほどよい数であり、両者の本文の関係を考えるにあたっては恰好の材料たりうる。

『都名所往来』を組上に載せながら、「翻刻」とは異なる「覆刻」という出版技法によって出版された江戸版往来物の本文の性格を明らかにしていきたい。

一

まず、本稿でとりあげる『都名所往来』の伝本について触れておく。上方版と江戸版の『都名所往来』の関係を考える上でとりあつかうべき伝本には、以下のようなものがある。

上方版 ①刊年不明 武村嘉兵衛版

(三次市図書館平井文庫、東書文庫、小泉吉永氏 図1)

②刊年不明 鈴木太兵衛版

(龍谷大学図書館、小泉吉永氏 図2)

江戸版 ③延宝三年 松会版

(国立国会図書館、国文学研究資料館、東京大学国語研

究室、東書文庫内旧石川謙、母利 図3)

④刊年不明 無書肆名版(母利 図4)

『都名所往来』という書名は、当時の書肆のまとめた書籍目録の中では、貞享二年に出版された『広益書籍目録』の「往来」部に、はじめてその名前を見ることができると考えられる。『広益書籍目録』は、京都の西村市良(郎)右衛門他あわせて四軒の本屋により出版された書籍目録であり、主として京大坂の本屋の出版物を掲載していると考えられる。上方の本屋から出版されているのは、現存するものでいえば、武村嘉兵衛版と鈴木太兵衛版の二種であるが、現存する伝本で見ると、両版は文字の微細な欠けまでもが一致しており、明らかに同じ版木を用いて出版されたものである。

国文学研究資料館作成の「日本古典籍総合目録データベース」、および国立情報学研究所「CINII」によれば、鈴木太兵衛の出版物はほぼ寛文から元禄頃に集中しており、一方の武村嘉兵衛のものは明和から寛政頃を中心としている。これだけで言えば、貞享二年刊行の書籍目録に記載される上方版『都名所往来』は鈴木版をさしているかのように見えるが、両版を比較してみると、武村版の方が若干刷次が早いよ

うに見受けられる。鈴木本の寛文から元禄頃の年号をもつ出版物も、多くは求版の可能性がある。両版とも版木の状態はけっしてよくなく、かなり後の求版後刷本のように見受けられる。

『都名所往来』には、本文の最後に、「干時延宝二寅初秋鈴木鹿定親造之畢」という文言(跋)があり、③の「松会開板」の書肆名をもつ江戸版には、「延宝三乙卯年四月吉日」という刊年が記されている。この「延宝三乙卯年四月吉日」が、もともと上方版にあった刊記だとすれば、現存伝本にはそのような刊記をもつ上方版は見当たらない。おそらく「延宝三乙卯年四月吉日」の刊記をもつ某本屋の出版した上方版があり、同じ版木を用いながら「延宝三乙卯年四月吉日」の刊記と某本屋の書肆名を削り入木し、明和から安永ころ出版したのが武村版。その武村の本屋名を削りさらに入木したのが鈴木版であろう。

③と④の江戸版は、武村版の前にあった延宝三年四月出版の某上方本屋版(現存不明)を原稿として覆刻した版と思われる。③④の両者は酷似するが、微細な字体の異同をはじめ、次のような異同があり、異版であることは明らかである。字体が酷似することからして、③と④は別々に上方版から覆刻されたのではなく、③④同士が覆刻関係にあるようにも思われるが、詳細は、上方版と③④の異同を比べてみよからの判断となろう。

二

以下は、上方版である武村版(鈴木版も同じ)と江戸版である③④

図1 上方版(武村嘉兵衛版) 小泉吉永氏蔵

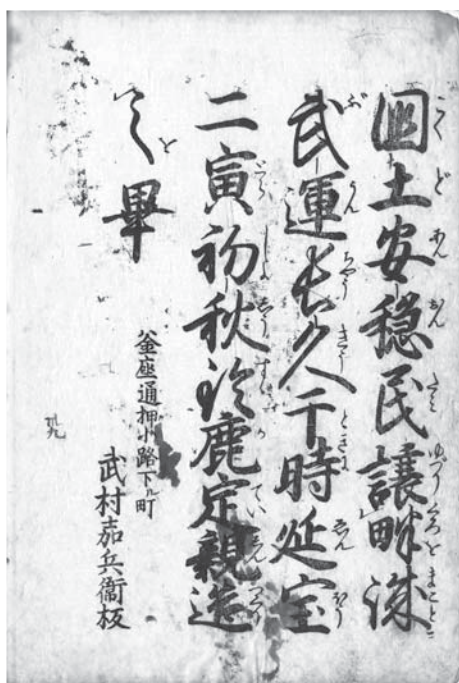


図2 上方版(鈴木太兵衛版) 小泉吉永氏蔵

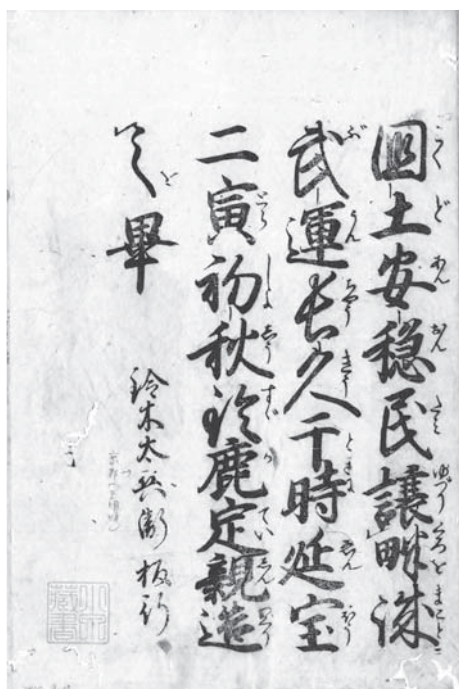


図3 江戸版(松会版)

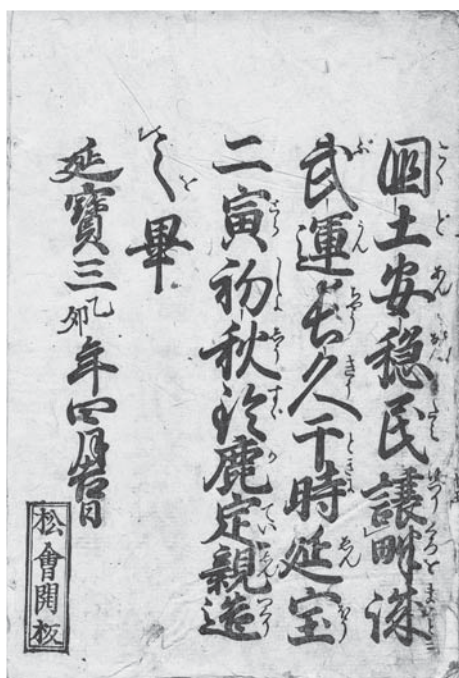
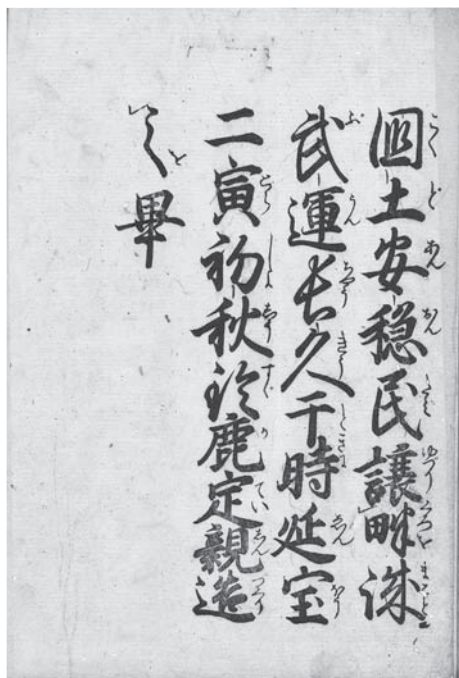


図4 江戸版(版元不明版)



それぞれの間で見られた異同の一覧である。

上巻	上方版		
目次	なし	③	④
二ウ	別而之	別而之	別而之
四ウ	神武天皇 百十四代	神武天皇 百十四代	神武天皇 百十四代
五ウ	殷富門 御門也	殷富門 御門也	殷富門 御門也
六オ	神祇	神祇	神祇
六ウ	九天之	九天之	九天之
七オ	渴仰之 聖君之 處也 御門之 町屋之躰	渴仰之 聖君之 處也 御門之 町屋之躰	渴仰之 聖君之 處也 御門之 町屋之躰

七ウ	嵯峨野 有明月	嵯峨野 有明月	嵯峨野 有明月
八オ	小路	小路	小路
九オ	北小路七条	北小路七条	北小路七条
九ウ	西洞院町室町	西洞院町室町	西洞院町室町
十ウ	処也 人民	処也 人民	処也 人民
十一ウ	元三天師	元三天師	元三天師
十二オ	山蔭 日本	山蔭 日本	山蔭 日本
十二ウ	嵯峨天皇	嵯峨天皇	嵯峨天皇
十三オ	一文字之	一文字之	一文字之
十五オ	御家 山科	御家 山科	御家 山科
十五ウ	貞観之	貞観之	貞観之
十六オ	石有 天王	石有 天王	石有 天王
十六ウ	院之	院之	院之

十七才	国阿上人 円山 号二	池有 山下	千寿観音	御事也 祭有 馬止有	天皇之御時	千日参	御影有 河原者 大仏者本尊	四十五間 八間 十五間 日本 大仏殿也 二王門	十七ウ
十七才	国阿上人 円山 号	池有 山下	千寿観音	御事也 祭有 馬止有	天皇之御時	千日参	御影有 河原者 大仏者本尊	四十五間 八間 十五間 日本 大仏殿也 二王門	十七ウ
十七才	国阿上人 円山 号二	池有 山下	千寿観音	御事也 祭有 馬止有	天皇之御時	千日参	御影有 河原者 大仏者本尊	四十五間 八間 十五間 日本 大仏殿也 二王門	十七ウ

二十一才	高麗国 数万人 此所 三十三間堂者 本尊千手	平忠盛 弓之名人	二千 七千数 寛文	是也 一丈	左大臣 開山忌 東福寺者 弟子	通天 天王 弘法大師 九重	二十一ウ
二十一才	高麗国 数万人 此所 三十三間堂者 本尊千手	平忠盛 弓之名人	二千 七千数 寛文	是也 一丈	左大臣 開山忌 東福寺者 弟子	通天 天王 弘法大師 九重	二十一ウ
二十一才	高麗国 数万人 此所 三十三間堂者 本尊千手	平忠盛 弓之名人	二千 七千数 寛文	是也 一丈	左大臣 開山忌 東福寺者 弟子	通天 天王 弘法大師 九重	二十一ウ

三ウ	神前 号二	神前 号二	神前 号一
四才	妓女 仏御前 草庵也 権現 木之	妓女 仏御前 草庵也 権現 木之	妓女 仏御前 草庵也 権現 木之
四ウ	同	同	同
五才	五智 勅願所	五智 勅願所	五智 勅願所
五ウ	北山	北山	北山
六才	生 念仏	生 念仏	生 念仏
六ウ	一条	一条	一条
七才	天神 小町 石塔	天神 小町 石塔	天神 小町 石塔
七ウ	天神 小町 石塔	天神 小町 石塔	天神 小町 石塔
八ウ	後白河院	後白河院	後白河院

九才	上御霊 万年山 大念仏 一 号二	上御霊 万年山 大念仏 一 号二	上御霊 万年山 大念仏 一 号二
九ウ	荒神 神有 祭有 千年一	荒神 神有 祭有 千年一	荒神 神有 祭有 千年一
十才	春日之 未開紅 本願寺 諸人	春日之 未開紅 本願寺 諸人	春日之 未開紅 本願寺 諸人
十ウ	祭有 千年一	祭有 千年一	祭有 千年一
十一才	本願寺 諸人	本願寺 諸人	本願寺 諸人
十一ウ	本願寺 諸人	本願寺 諸人	本願寺 諸人
十二才	本願寺 諸人	本願寺 諸人	本願寺 諸人
十四才	木幡 天子	木幡 天子	木幡 天子
十五才	中堂寺 内外	中堂寺 内外	中堂寺 内外
十五ウ	中堂寺 内外	中堂寺 内外	中堂寺 内外

上方版と③④の関係をくらべてみると、③の方が圧倒的に上方版に近いことがわかる。③と④では、振り仮名の有無に大きな違いがあり、④は上方版にたいして少なからぬ数の振り仮名が欠けてしまっているのである。くわえて、振り仮名の有無という点だけではなく、たとえば上方版の「人民」(上巻・第十裏)が、③では「人民」(③)であり、④では「人民」(④)となっているような振り仮名の異なりそのものをも考慮すれば、上方版と③との近さは動かしがたいと言えるであろう。常識的には、まず松会が、上方版(「延宝三乙卯年四月吉日」の刊記をもつ某本屋の出版した本。伝存不明)をもとに覆刻版(③)を出し、④は、この③を原稿として、さらに江戸の別の本屋が覆刻した版とひとまず考えられる。

ところが、その一方で、上方版と④もが直接の覆刻関係にあったのではないか、と思わせる箇所も少なからずある。とくにそのことを思わせる箇所が上巻第二十一丁裏から第二十三丁表にかけて集中しているので、それにも触れておこう。たとえば上方版の第二十一丁裏「平忠盛」は、「平忠盛」(③)、「平忠盛」(④)であり、「たいらの」という振り仮名を持つのは、③ではなく④の方である。これだけでは、③から④の覆刻のさいにたまたま補われた、という可能性もあるが、同じ面の「弓之名人」(上方版)の「弓」という意味不明の振り仮名を「正しく」受け継いでいるのは、「弓之名人」(③)とある③ではなく、④の方である。これは上方版を「原稿」にしないかぎり付けることのできない振り仮名である。上方版と③の親密さは疑いようがないが、一方にうかがいえる上方版と④の関係も無視できない。

以上のように、上方版と③および④相互の関係をすつきりと整理することはむづかしく、今は結論を保留するしかないが、基本的には、上方版と③の關係が圧倒的に近いことは否定できない。そのことを確認した上で、次の問題に移ることにしたい。

三

ここで、上方版の本文と、それを原稿として覆刻したと思われる③の松会版の本文との関係をあらためてふり返ってみよう。

かつて筆者がとりあげたことのある明暦三年刊松会版『江戸／新用文章』は、上方版の『かわり／新用文章』の覆刻版と思われる版であるが、その本文の異同は、大半が下巻本文の振り仮名の出入りに関する異同であった。それ以外の異同と言えば、「涯分」(上方版)↓「涯分」(江戸版)(上巻第二十二丁表)という振り仮名自体の異なり、および、「けだもの偏」に付けられた振り仮名「けだものへん」の「へ」の字母が、「遍」(上方版)↓「部」(江戸版)(下巻第十六裏)に変わる、というわずかに二箇所にすぎない。

一方、同じように承応三年刊行の上方版を明暦二年に江戸の某本屋が覆刻して出版した『人倫名尽』においては、基本的に覆刻版でありながら、本文の内容までもがところどころ違えられてしまっており、振り仮名云々とは次元の異なる異同が現れてしまっている。一口に覆刻版といっても、江戸の本屋の試みた方法には、できるだけ上方版に忠実にというありかた、自由自在にという、二つのありかたがあっ

たようである。

しかし、江戸版の『江戸／新用文章』と『人倫名尽』をながめてみると、もう一つの点に気づかされる。『江戸／新用文章』は、上方版の端正で典型的な御家流の書風をそのまま忠実に覆刻しているのに対し、『人倫名尽』の方は、元の上方版の字体・書風をなぞりながらも、一見して、いかにも江戸版を思わせる字体・書風へと変化が付けられているのである。上方版をもとに江戸の本屋が覆刻出版するさいには、字体・書風をどのように写し取るかという点においても、以上の二つのタイプがあつたことになる。

往來物版本の多くは、その本文の内容が学ばれると同時に、筆をもつ手習い子の手本としての役割をももっていた。こと往來物に関して、江戸の本屋が上方版を「原稿」としてそれを出版しようとするさい、すでに手習い手本としての役割を十分に果たしていた原稿を、新規に書き換える必要はまったくなかったのである。江戸の本屋が、往來物については上方版を覆刻により出版したのはこの理由による。疑問に思うのは、『人倫名尽』のごとき、覆刻という、本来はその元となつた版(上方版)と酷似するはずの出版技法によって作られた江戸版が、なぜ一目見て、いかにも江戸版らしい雰囲気を漂わせているのか、ということである。

筆者は、その『人倫名尽』の上方版と江戸版との字体・書風の異なりについて、かつて次のような指摘をしたことがある。⁵⁾

両版を眺めると、文字の配置や細部までもがそのままであり、一方が他方をもとに、まったく版の姿を改めて内容だけ翻刻した、

という関係にはないことが確認できる。繰り返しになるが、両版はやはり覆刻の関係にあると見てよい。ところが印象としては、誰の目にも明らかのように、その書風には違いを感じる。覆刻という方法によって文字が写し取られているのに書風が異なつて見えてくるのである。江戸版の本文版下を作るさい、筆工は、もとの上方版を透き写しながらも、その書風にかんがりのアレンジを加えていったようである。具体的には、かなりぞんざいに見える上方版の線を、一画一画、抑揚を強調し、「はね」「はらい」「折れ」といった運筆を大きく、時には過剰と云つてよいほどに表現していたのである。江戸版においては、これよりずっと小さな文字サイズで、しかも強く崩して書かれた場合でも、この一画一画の抑揚を強調し、「はね」「はらい」「折れ」といった運筆を大きく、時には過剰に表現する、という特徴は一貫している。

この指摘と類似したことが、実はこの『都名所往來』についてもあてはまるのである。端的に言えば、上方版の字体・書風をきわめて忠実になぞりながらも、程度の違いこそあれ、そこににがしかのアレンジの加えられているのが江戸版の書風だといつても過言ではない。

『都名所往來』の上方版と江戸版を横に並べて紙をめくり比べていても、実は目に立つような違いがすぐに見つかるわけではない。むしろ、江戸版の、忠実で正確な覆刻技法に感嘆する程度である。しかし、文字の一面一面の書き方を仔細に比べていけば、そこには、微妙だが、明らかに区別できる異なりを見つけることができる(図5〜図8)。

この『都名所往來』は、すでに江戸版らしい書風の定着した延宝年

図5 上方版 小泉吉永氏蔵 上巻・第三丁表

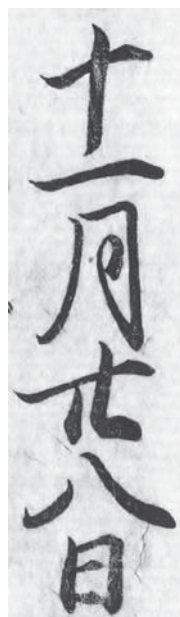


図6 江戸版 ③

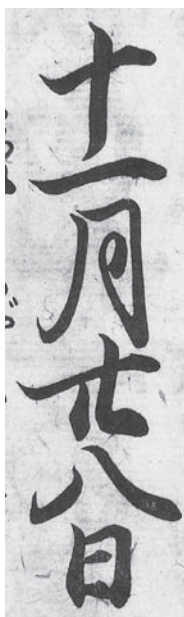


図7 上方版 小泉吉永氏蔵 上巻・第六丁表

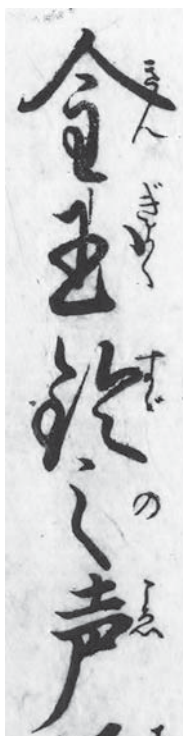


図8 江戸版 ③



江戸版往来物の本文

間の出版であり、もしこれが「翻刻」よっての版下作成にはじまる出版であったとすれば、その書風は、基本的には御家流をベースにしながら、筆工が、字体に「鋭くメリハリをつけ」、かなり自由奔放に筆を起こしていったものだったはずである。一方、手習いの役割をもたされた往来物の出版にあたっては、江戸の本屋は、基本的に上方版を覆刻によって出版した。その意味で、この覆刻による版下作成にはそのような江戸版の筆工それぞれの書き癖は表に出にくいはずなのであるが、それでもなお時にはこのような筆工の癖の出現する所が少なくなかった、ということなのであろう。

ただ、論述の筋道を混乱させないためにあえて触れてこなかったが、このような覆刻出版における字体・書風の異なりを生み出した原因には、彫工の技術、彫り癖を想定することも可能であろう。覆刻出版における版下原稿を、筆工が上方版を透き写しによって作成するさいにこそ、筆工の書き癖、個性は出現しうる。しかし、上方版そのものをばらして版下原稿にしていたのだとすれば、そこに筆工の書き癖が入り込む機会はない。それでもなおそこになんらかの江戸版らしさを思わせる「癖」が現れているとすれば、それは彫工の彫り癖が現れている、ということになる。この点については、それを証明する確たる証拠もなく、今はひとまず可能性のレベルにとどめておきたい。

おわりに

三回にわたり、御伽草子、仮名法語、往来物というジャンルの出版

物について、ごくわずかであるが具体的に作品をとりあげ、その江戸版としての特徴を、本文の面から考察してきた。前二者については四作品をとりあげたが、結果的には、いずれも予想以上にその本文が良好であることが明らかになった。上方版の意味の通りにくい所は書き改め、あるいは、筆工の言語感覚にしたがった変更のあとさえ認められる。むろん、目移りを理由としたと思われる脱文や、他のケアレミスもないわけではないが、全体として杜撰な本文というほどのものではない。今回とりあげた往来物はわずかに一点だけであるが、筆者が今までにあつかってきた作品と合わせて、忠実な覆刻をおこないつつも、そこに筆工の書き癖による江戸版らしい書風がおのずから現出していることも確認できた。

近世の出版物の中心は、数量的にも質的にも、仏書、儒書、医書の類であることは動かしがたいが、こと近世前期の江戸においては、とりあげてきた御伽草子、仮名法語、往来物といったジャンルこそ出版物の中心であったことはまちがいない。今、三回の論をふりかえって、それらの本文の特徴を総括すべき適切な言葉がなかなか見つからないが、江戸版の包括的な研究にあたっては、このような具体的な作品の本文研究の積み重ねがさらに必要であることを強く感じている。今後の課題として継続していきたい。

注

(1) 「江戸版御伽草子の本文―近世前期における江戸版本文の特性(1)―」
〔和漢語文研究〕第十三号・平成二十七年刊)、「江戸版仮名法語の本

文―近世前期における江戸版本文の特性(2)―」(『京都府立大学学術報告(人文)』第六十八号・平成二十八年刊)。

(2) 『用文章』古版考―近世初期往来物拾遺1―」(『岐阜大学国語国文学』第二十号・平成三年刊)。

(3) 「古版往来物における〈合冊再刊〉について」(『東海近世』第十五号・平成十七年刊)。

(4) 国文学研究資料館作成「日本古典籍総合目録データベース」では、「京都往来」を統一書名とし、「寺社都名所往来」「洛陽往来」を別名としてあげている。伝存本のいずれにも内題はない。伝存本の題簽で確かめることができるのは、「寺社都名所往来」(三次市立図書館蔵、小泉吉永氏蔵、架蔵)、「都名所往来」(架蔵)、「都名所／尊円流」(国文学研究資料館蔵)などである。

(5) 出稿「近世前期江戸版の本文版下」(『京都府立大学学術報告(人文)』第六十四号・平成二十四年刊)。

付記

本稿は、平成二十九年年度日本学術振興会科学研究費補助金課題研究「近世前期出版における江戸版本文の特性研究」(基盤研究C・15K02953)による研究成果の一部である。図版のうち所蔵者名を記していないものは母利蔵本である。写真掲載を許可された小泉吉永氏にあつくお礼申しあげる。

(二〇一七年十月二日受理)
もり しろろ 文学部日本・中国文学科教授